水は「当たり前」ではない

沖縄県　城東中学校　二年　小山　蒼介

誰しも「水が好きなときに好きなだけ飲めるのは当たり前」と思ったことがあるだろう。意識すらしたこともない人もいるかもしれない。僕も、例外ではなくそう思ったことがある。しかし、それは大きな間違いである。僕たちが不自由なく水を飲んだり、使ったりできるのは、先人たちの工夫と努力の結晶であることを、どれくらいの人が知っているだろうか。

僕の暮らしている宮古島は、特徴的な性質を持っている。それは、地中の琉球石灰岩層の性質だ。その性質によって、島の人々は昔から水を得ることに苦労していた。琉球石灰岩層は隙間が多い層で、雨がどれだけ降ろうが水分が地中深くに染み込んでしまい、雨水が溜まりにくい状態だった。干ばつが続くとどこからも水を運んでくることはできないため、島の農業は大きな打撃を受け、人々は苦しんだ。そこで工夫を施し誕生したのが、宮古島の地下ダムである。地中に壁を作って雨水を塞き止める設備を設置し、地中に雨水が溜まりすぎることのないように、壁の上方を少し開けるという工夫を凝らしているそうだ。目に見えない島の大地の下で、水を得るための大きな努力があったことに驚いた。地下ダムにより、島の農業は以前よりも収穫量が増加し、多様な作物を生産できるようになったそうだ。宮古島の山もない、川もないという地形に負けず、試行錯誤を繰り返し、見事自分たちの水を手にいれた先人たちは英雄と言えるだろう。

僕は以前、山形県のある地域に住んでいた。そこには、鳥海山という山があり、湧き水が豊富にあった。宮古島ほど水を手に入れるのに苦労していないので、そこでの暮らしの中では、僕自身、水への意識があまり高くなかったように思う。宮古島の水は硬水なので、飲料水はスーパーでミネラルウォーターを買うことが多いが、山形では湧き水が豊富だったので、ところどころに水くみ場があり、飲み水はそこでくんでいた。井戸を掘れば大抵の場所で湧き水が出ると聞いたこともある。だから水は「当たり前」に身近にあるものだと思っていた。

しかし、その水は鳥海山にしみ込んだ雨水や雪解け水が、再び湧き出るまでには、二十年の歳月を必要とするそうだ。この自然が与えてくれる恩恵を「当たり前」と、簡単に言っていいものだろうか。蛇口をひねれば水が出る、地下ダムによって、地中に水を貯める、湧き水が豊富にある。この環境は、決して当たり前ではない。自然の豊かさ、先人たちの知恵や工夫が水を守り、僕たちの暮らしを守ってきた。僕たちは、今の水に困らない「当たり前」の環境に感謝し、さらに水資源を守っていく努力をしていかなければならないと思う。同じ日本でも、それぞれの地域やそこにある地形の特質によって水への意識はガラリと変わり、手に入れる手段や工夫も大いに変化する。僕たちがこうやって日頃から水を当たり前のように飲めるのは、必ずその背景に先人たちの工夫と努力がある。

蛇口から出る水も、目に見えない大地の中で島を守る水も、さとうきび畑に散水されるスプリンクラーからの水も、その一滴一滴の水には、ここに来るまでに長い長い道のりと、たくさんの人々の歴史がある。そのことを心に留め、僕はこれからも「当たり前」ではない水を大切に、未来へ受け継いでいきたい。